

F D活動報告書

2024 年度

大東文化大学全学F D委員会

はじめに

全学 FD 委員会委員長 中野 紀和

2024 年度の全学 FD 委員会は、前期末と後期末に学生による授業認識アンケートを行い、6 月に全学 SD 研修会、10 月に全学 FD 研究会をそれぞれ 1 回実施した。

2021 年度は学生と教員による複数のアンケートを実施し、2022 年には学生による授業認識アンケートのみに変更する等、授業改善効果を高めるための模索を続けてきた。2023 年度は前年度の方針を継続しつつ、アンケート対象科目を各教員の担当科目のなかから履修者のもっとも多い科目に絞り、学生の回答率を高めることを目指した。その結果、2023 年度には学生の回答率を 30% 台まで戻すことができた。けっして満足のできる数字ではないが、2024 年度も同様の方法でアンケートを実施した。

回答率や回答時間のデータから、授業時間中に教員が回答を促すことの有効性が明らかになったため、教員がアンケートの実施を失念することがないように、今年度も教員控室の事務の方から声をかけていただく等、多くのご協力を頂いた。その結果、前期も後期も回答率 30% 台をなんとか維持することができた。

分析に際しても、2023 年度に引き続き、教員所属のみならず学生所属（全学共通科目のみ対象）でデータを出し、さらに 2024 年度は学科間の相対的なバラツキを比較するために変動係数を用いる等の試みを行った。詳細については「学生による授業認識と大学教育：大東文化大学授業認識報告書（全学データ）2024 年度」をご参照いただきたい。

全学 FD 研究会では「合理的配慮の必要な学生に向けた授業づくり」をテーマとして、「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」の改正のポイントを理解し、すべての学生が公平な教育環境で学ぶことについて考える研究会を開催した。学生対応で苦慮した経験を持つ教員も多く、今回の内容を実際の授業運営に活かしたい、教職員間の連携・情報共有の重要性や合理的配慮の基本方針を再認識したといった意見が多く寄せられた。

全学 SD 研修会では、「新教育課程の背景とこれからの社会が求める人材像」をテーマに、新教育課程の背景を理解したうえで、高大連携の重要性やこれからの大学教育で求められるスキルや能力について学ぶことができ、今後の入試のあり方を再考する機会となった。なお、FD 研究会・SD 研修会ともに、授業等で参加できなかった教員は当日の録画を manaba 上で視聴した。いずれも多く参加があり有意義な会となった。

本年度も全学 FD 委員会の活動に多くの方からご助言、ご協力をいただいた。あらためて感謝申し上げます。ありがとうございました。

2024年度FD活動報告書

全学FD委員会

全学FD研究会

実施日時：2024年10月21日（月）15:00～16:30 対面開催

※2024年10月28日～2025年1月6日 記録動画の視聴期間

実施形式：対面開催及びmanabaでのオンデマンド動画視聴および質疑応答

参加人数：224人

テーマ：「合理的配慮の必要な学生に向けた授業づくり」

講師：佐々木銀河氏（筑波大学人間系准教授）

内容：

2024年4月に「障害者差別解消法」（正式名称：「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」）が改正され、障害のある学生の困難を軽減する「合理的配慮」の提供が私立大学でも義務づけられた。今年度の全学FD研究会は、法改正のポイントを理解し、配慮の必要な学生を含めたすべての学生が公平な教育環境で学ぶことについて考える機会とした。

佐々木先生からは、合理的配慮とは「障害のある人が障害のない人と公平に参加できるように環境を『調整』することである」と定義が示され、教育の本質を損なわない範囲で、受講プロセスや支援方法を調整することが求められると説明があった。到達目標を変えずに適切な支援が行われることの重要性が示された。具体的には以下のようなポイントが示された。

本人の意思を尊重する必要がある、保証人（保護者や家族）の申し出だけでは決定できない。また、大学にとっての負担の度合いを考慮する際には、教職員個々の心理的負担ではなく、組織全体のリソースをみるべきである。教育現場では、障害の内容やそれに伴うニーズによって異なる対応が求められるため、柔軟な調整が必要となる。新たな知識や技術の修得を支援する一方で、到達目標や評価基準は変えてはいけない。周囲が変わることが求められる。具体的な支援方法（例：プレゼンテーションの形式変更）も考慮する必要がある。

なによりも教職員間の意識向上と協力が不可欠であり、大学全体での取り組みが重要であることが強調された。障害のある学生への支援は個々の努力だけでなく、組織全体での協力が必要であることを改めて認識した。

全学SD研修会

実施日時：2024年6月3日（月）15:00～16:30 対面開催

※2024年6月17日～2024年7月31日 記録動画の視聴期間

実施形式：対面開催及びmanabaでのオンデマンド動画視聴および質疑応答

参加人数：258人

テーマ：「新教育課程の背景とこれからの社会が求める人材像」

登壇者：株式会社進研アド 改革支援本部 本部長 高坂栄一氏

大東文化大学第一高等学校 校長 橋本準一氏

大東文化大学入学センター 所長 堀川信一氏

内 容：

2025 年度より新学習指導要領で学習した高校生が入学することを踏まえ、改めて新教育課程の背景等を正確に理解することは、大学教育の体系化を進めるうえで重要である。そこで高大接続改革を交えながら新教育課程の背景等について理解を深められるよう企画した。

高坂氏からの話題提供に始まり、橋本先生からは新学習指導要領の運用状況と学校現場の現状について、堀川先生からは今後の入試動向ならびに探求成果利用入試について、それぞれ報告があった。それぞれの見地から、大学の教育力や新学習指導要領の意義、そして高大連携の重要性を中心に説明がなされた。

文部科学省が掲げる教育の目的は「多様な幸せと課題への挑戦を実現する人材育成」（内閣府「第 6 期科学技術・イノベーション基本計画」）であり、探求力や学び続ける姿勢の重要性が強調されている。大学ではリーダーシップや忍耐力が必要とされ、学生は論理的思考力や規範的判断力を身につけることが重要だとされる。

文部科学省は新しい力の習得を教育改革の本質とし、社会が求める人材像の育成を視野に入れ、初等中等教育における探求型学習の推奨、デジタル技術の導入を進めアウトカムを重視している。他方、知識の応用や主体的学びの時間不足といった問題があることも確認されている。大学と社会とのつながりを強く意識したうえで、大学教育では社会で必要とされるスキルや非認知能力の育成、ICT スキル活用能力の向上が求められているとの指摘がなされた。これらを背景に、これまで以上に高大連携の重要性を再認識し、多様な連携のあり方を模索する必要があることが強調された。

以上

2024 年度 FD 活動報告書

文学部

実施日時：2024 年 9 月 9 日（月）14：30-16：10

実施場所：2 号館 2 階 0220 会議室

題 目：初年次教育の取り組みについて

発 表 者：徳植俊之（日文） 亀澤孝幸（中文） 菊池かおり（英米） 塩崎義明（教育）
河内利治（書道） 湯城吉信（歴史） 浜田久美子（全学共通科目）

参加人数：61 名

要旨（発表者の内容）：

初年次教育という言葉を知らない大学教員はいないだろう。しかし、文学部においては、いまだにその内容についてのコンセンサスがとれているとは言えないのかもしれない。どのような内容を、どの範囲まで教えるか——各学科における初年次教育の位置づけと、その具体的な実践の内容について理解を深め、このトピックについて学部全体で考える。このテーマのもと、文学部各学科および全学共通科目担当教員の代表者が、下記の発表を行った。

日文：初年次教育を考える—日本文学科の初年次教育—

中文：中国文学科の初年次教育—新設科目「ファーストイヤー・セミナー」の概要と目的

英米：英米文学科初年次教育の取り組み

教育：コミュニケーション能力の育成に目を向けて

書道：初年次教育のとりくみ

歴史：歴史文化学科の初年次教育—歴史文化学入門 AB の紹介

全学：全学共通科目の初年次教育について—文学部という枠組みを考える—

「(大学における学習スキルも含めた) 学問的・知的能力の発達、人間関係の確立と維持、アイデンティの発達、キャリアと人生設計、肉体的・精神的健康の保持、人生観の確立など、大学における教育上の目標と学生の個人的目標の両者の実現を目指したもの」という文部科学省による初年次教育の定義が、書道学科の発表において提示されたが、文学部各学科の DP に沿う形で、それがどのように実践されているのかが共有される機会となった。特に学科間の実践内容が明確に異なる点として、共通テキストの有無、共通の授業内容の有無があった。学科内で一律の初年次教育を実践する上で、これらは必須のものであるように思える。ゆえに、テキスト、授業内容の選択が教員に任されている学科にとっては、非常に有益な事例が提示されたと言える。また、教員の個性を活かしつつ、学科の全学生に一律の初年次教育を提供する方法として、担当者複数人が各クラスを回るリレー方式の授業（歴史）の事例も、とても参考になるものであった。

また、文学部 FD においてこれまで十分に焦点が当てられてきたとは言えない全学共通科目の状況についての報告も重要であった。「全学的な初年次教育」として、学生の主体性を引き出すために、学生が能動的に取り組むための時間（学生同士の討論など）を講義の中に設ける工夫を行いつつ、「文学部の初年次教育」として、人文学が軽視される風潮のなかで、人文学が不可欠であること、ならびに人文学が個々の主観に拠る学問でないことも示すという二つの目標が、ひとつの授業に共存しているのだと報告

された。そのさらなる実現に向けて、受講者数の過多など、全学共通科目特有の問題に対処していく必要があるのだということが明らかになった。

研究会（研修会）で得られた成果

共通テキストや、共通の授業内容などを設定することで、学科内一律の初年次教育の実践が模索されているのだということが、具体的な各学科の事例を通して明らかになった。これがいまだ実現されていない学科にとっては、今後の実現に向けて検討すべき具体的な事項を把握する機会となった。また、現状の共通テキストや、共通の授業内容の問題点などを指摘する発表では、それらの修正すべき点などが提示された。これらは、現状の初年次教育の改善に向けて各学科がテキストや授業内容を検証する上で、各学科の参考になるものであった。また、初年次教育の重要な使命のひとつである「人間関係の確立と維持」という点について、具体的なとりくみが特に詳細に報告された。初年次教育に携わる全教員が向き合うことになるこの問題について、有効な手法が共有されたことも大きな成果であった。

以上

2024 年度 FD 活動報告書

文学部日本文学科

実施日時：2月25日 16:30～16:55

実施場所：日本文学科会議室

題 目：カリキュラムポリシー・ディプロマポリシーと授業の連関について

発 表 者：日本文学科専任教員によるディスカッション形式

参加人数：12名

要旨（発表者の内容）：

改めて日本文学科のカリキュラムポリシー（以下、CP）・ディプロマポリシー（以下、DP）を確認したのち、各教員が関わる学生の印象も確認し、CP・DP の認知度があまり高くないことがあらためて問題として提起された。

これらのポリシーは、履修の手引きに記載されているものの、学生の認知度を高めていくためには不十分であり、認知度を高める方策の検討を行った。

また、CP で言及されている「GPA 制度を導入して、客観的な評価基準を適用する。」について、学科としての見識を再度確認した。加えて、成績評価に関わり、従来の印象的評価を批判的に検証した。また、一部教員から、ルーブリックの実践事例についても情報共有があった。

研究会（研修会）で得られた成果

CP・DP の認知度を高める方策として、2025 年度から順次下記事項を専任教員主導で実施することとした。

- ・ 新入生ガイダンス等での学生への周知
- ・ 初回授業のガイダンスパートで CP・DP との連関性の説明
- ・ シラバスへより教員の言葉で具体的に明記する。（2026 年度以降）

以上

2024 年度 FD 活動報告書

文学部中国文学科

実施日時：2024年9月9日（月）12:00～

実施場所：2号館4階2-0429中国文学科会議室

題 目：本学科新設オムニバス授業「ファーストイヤー・セミナー」の理念と構成

発 表 者：亀澤孝幸

参加人数：7名

要旨（発表者の内容）：

発表者より、2025年度から中国文学科の1年次必修科目として開講する予定の「ファーストイヤー・セミナー」について、その理念と構成（シラバス案を含む）についてご報告頂いた。「ファーストイヤー・セミナー」は、新入生の初年次教育の一環として、中国文学科所属の専任教員がオムニバス形式で中国学およびその周辺の文化のトピックについて、各自の専門分野に基づいて講義をするものである。これによって、新入生の専門分野に対する興味関心や、より専門的な領域に入る一つのきっかけとなることを狙いとする。本発表では、改めて学科内の教員にその内容や意義について考える場を提供し、今後のシラバス作成や授業の準備等の手がかりとしたい。

研究会（研修会）で得られた成果

当日の研究会では、発表内容について活発な意見が交わされ、今後の課題等も含めて有意義な情報交換が行われた。この研究会によって、学科内の教員たちに、オムニバス授業「ファーストイヤー・セミナー」の意義と、初年次教育の重要性を改めて認識させることが出来たと考えられる。これらは、教員の教育力の向上や、実際の授業の内容やその方法等に十分に生かされていくと期待される。

以上

2024 年度 FD 活動報告書

文学部英米文学科

実施日時：2025 年 2 月 14 日（金）12 時 00 分～12 時 20 分

実施場所：8 号館 2 階 英米文学科会議室

題 目：原著／原文で学ぶ授業の工夫

発 表 者：学科の教員全員

参加人数：11 名（うち 1 名は当日欠席のため資料の共有による発表・参加）

要旨（発表者の内容）：

語学の授業ではなく、専門の授業（演習やゼミナールなど）では、文学作品や批評、論文などを英語で読むことが学習の中心となる。しかし、文献を学生に渡し、読解するように指示するだけでは、学生が正確に文献を理解する／英語で書かれた文学作品を解釈する、といった目標を叶えているとは言えない。各教員は、様々な工夫をして、原著／原文を授業に取り入れていると思われるが、その成功例と失敗例を共有し合う機会は多くない。今年度の学科 FD では、そのような観点から、原著／原文を授業資料として、どのように授業で用いているか、学生に読ませているかということを情報交換し、議論をする機会を設けることにした。

FD 研究会に先駆けて、各教員が事前に提出をした報告書からは、以下にまとめるような工夫が紹介された：

- ・授業外に、発表担当となっている学生が個別に教員と質疑応答をできる時間を設ける。
- ・翻訳をさせるのではなく、英文で理解することを目標とするので、授業中に学生が行う作業として、文献の翻訳ではなく、文献について質問をさせる。
- ・英語の行間を、想像力を働かせて、作品を楽しみつつ、深く読めるようになるよう、学生を導く。
- ・長編の文学作品を読む際には、映像を積極的に用いる。短編の作品の場合には、精読を意識して、ワークシートに取りくみつつ読ませるようにする。
- ・原著にこだわらず、翻訳を積極的に利用する。文学作品の内容や、文学作品が伝える主張／思想を理解することに重きを置くため。
- ・英語テキストのなかで、味わう部分、解釈する部分、細かく読む部分を意識的に分け、ヴァリエーション豊かな読み方を実践させる。

これを踏まえて行われた質疑応答でも「原文／原著を用いた授業において学生にプレゼンを行わせる際の工夫は？」との質問に対して、「特定の作家の人生や、作家の作品などについて、比較的大きな内容の課題を与えた後に、細部に焦点を当てた作品の精読を行う」という回答があった。この他にも、授業における AI の使用の可否などについても、重要な議論をすることができた。

研究会（研修会）で得られた成果

英米文学科は、学科名にも表れている通り、「英語で読むこと」と「文学を読むこと」の二つの作業を行うことが授業の中心になる。後者を実現するためには、必要に応じた翻訳の使用も有効であることが

学科内で確認された。その上で、どのようなバランスで、翻訳と原著／原文を読み分けるかなど、今後議論していくべき課題も可視化された。さらに、AI をどのように授業に取り入れるか、あるいは取り入れないかという点についても今後、積極的に議論をしていくべきであることが確認された。

以上

2024 年度 FD 活動報告書

文学部 教育学科

実施日時：2025 年 2 月 14 日 10:00～11:10

実施場所：板橋校舎 3 号館 2 階 3-0214 教室

題 目：「基礎演習」/「教育学演習(ゼミ)」の内容及び方法について

発 表 者：2 名 塩崎義明特任教授・北風菜穂子講師

参加人数：18 名(+1 名 事務職員)

要旨（発表者の内容）：

司会進行…深見友紀子特任教授(2024 年度教育学科 FD 委員会委員長)

○「基礎演習」で何を教えるか 塩崎義明

4 年前の赴任当初、この演習の内容は自由とのことなので、次の 3 点に留意しながら取り組んでいる。

①クラスの学生同士をつなげ、その出会いの中で、生き方などを学び合う関係をつくること、②教師として、保育士としての「自分軸」を形成すること(物の見方・考え方、そしてスキル)、③教員・保育士の資格を得るための基礎となる力量を養うこと。

具体的には、①学生同士をつなげるための集団あそびの体験、②時事問題に関する語り合い、③塩崎実践のレポートに対する批判的な分析、④班づくりやクラス会議、コンサートの発表や練習を通じて、関係づくりの体験などを行っている。

不登校の学生にどのように寄り添うか、現代の若者たちは、何を笑い、そして泣き、どのような文化の中で、どのような思想形成がなされているのかを知ることができ、担当者として学ぶことも多い。

○ゼミ生とどう付き合えばいいのか 北風菜穂子

2020 年から「教育学演習」を担当することになり、今年度で 5 年目である。カウンセリング心理学は人気のあるゼミで毎年 22 名のゼミ生がいるが、ゼミおよび卒論の指導教員として学生に対峙する際、グループのファシリテーター、協同学習のプログラム立案者、卒論研究のマネージメントなど、さまざまな立場を適宜とらなければならないことに腐心している。

どのようにゼミ生と接したらよいかわからなくなり、不安になることも多いが、ゼミ指導を辞めたいと思うことはなく、今回、自身のゼミに対する気持ちや現状をお話しすることで、上手なゼミ運営を考える契機となればうれしい。

参加教員の発言

○「基礎演習」の方法

- ・詩を書かせて詩集をつくり、学生同士の関係づくりに役立てている。
- ・文献研究のトレーニングの場として本を読み、考え、感想を話すことを実践している。
- ・混声四部合唱に取り組んでいる。

- ・「基礎演習 2」は、アカデミックな習慣づくりの場であり、「教育学演習(ゼミ)」につなげる役割がある。
- ・「基礎演習 1」は、大学に慣れる、ゼロから関係をつくる場として位置づけている。学芸員の話を書く機会をつくったり、新聞を作成したり、図書館で借りた本をそれぞれのお勧め本としてクラスで紹介したり（ブックトーク）、社会問題を扱ったカルタ取りなどを行っている。
- ・教育のみならず、環境や人権など世の中のさまざまな社会問題についてグループ研究している。
- ・近年、教育学の古典的な文献輪読をする機会が減っている。以前は「基礎演習」の定番だったが、それらに触れなくてもよいかどうか。

○「教育学演習(ゼミ)」の北風先生の事例を踏まえて

- ・悩んでいるのは真剣に取り組んでいる証である。
- ・「教科教育法」は“エンターテイナー”として授業を行っているが、ゼミは悩みながらやっている。
- ・ゼミ生の遅刻が多いことに悩んでいる
- ・ゼミ運営に関して、それなりの心労はある。
- ・“読む、書く、話す、聞く”がスムーズにできなければ議論はできないので、一つずつばらして行っている。応答の仕方もフォーマット化したら、かなりやれるようになった。
- ・人間関係にあまり踏み込まず、聞き役に徹している。
- ・教員がイベントなどの種を撒くと、翌年以降自発的にやるようになった。文献輪読も自主的にさせている。

(参考)ゼミ担当教員の5つのスタイル

ファシリテーター： 全体を見る、進行する、起きていることを整理する

セラピスト： 語り手に寄り添う、傾聴、共感、エンパワメント（勇気づける）

アーティスト： 創造をたのしむ、演出家的役割

エンターテイナー： 場を演出する、場を盛り上げる、流れ・雰囲気をつくりだす

シャーマン： 自身がリチュアル（儀式・様式、枠組み）となる、その場の中心となる、開かれた集聚力

研究会（研修会）で得られた成果

教育学科では、1年・2年次に「基礎演習」を、3年・4年次に「教育学演習(ゼミ)」を開講しているが、「基礎演習」に関しては何を教えるのかは担当教員それぞれに任されている。「教育学演習(ゼミ)」の運営に関しても同様である。「このような方法でよいのだろうか」「悩んでいるのは自分だけなのだろうか」という思いを各教員が少なからず抱いていると思われる。そこで、課題を共有することで今後の改善につなげたいという意図から、FD研修会のテーマとして、「基礎演習」/「教育学演習(ゼミ)」の内容及び方法を取り上げることにした。発表者の内容、それを踏まえた他の教員の発言などを上記にまとめた。わずかな時間ではあったが、内容及び方法について情報交換できたことで、前向きに「基礎演習」に取り組もうという意欲につながった。また、ゼミ運営に関しても不安感が拭えた教員も多く、有意義な時間であったと感じている。

以上

2024年度FD活動報告書

文学部書道学科

実施日時：2024年9月12日（木）12：30～13：00

実施場所：東松山校舎2号館20205教室

題 目：初年次教育について

発表者：河内 利治 教授

参加人数：書道学科専任教員10名

要旨（発表者の内容）：

2024年度文学部FD研究会で河内利治教授が発表された「初年次教育のとりくみ」を基に、初年次教育における6項目の内の「2 人間関係の確立と維持」をトピックとして取り上げられ、2023年度書道学科FD活動報告書「初年次教育について」であげられた改善方法の中で、現在実施中の学生支援（2024年度部局別自己点検・評価報告書 基準7）についての現状報告がなされた。また、未実施となっている項目についても再確認し、問題解決に向けてより優先度の高い「個人面談」（問題が顕在化する前に。授業の悩み・友人関係・進路・授業に対する要望など）について、具体的な実施方法や内容を再検討した。

研究会（研修会）で得られた成果

来年度に下記の項目に沿って、個人面談を実施することになった。

- ①個人面談用の事前アンケートを作成。質問項目を整理する。
- ②個人面談実施前に事前アンケートをとる。
- ③事前アンケートを基に、土曜日の書道学基礎演習の1コマ（前期）を活用して、教員全員で一度に個人面談を実施する。

以上

2024 年度 FD 活動報告書

文学部 歴史文化学科

実施日時：2025年2月14日

実施場所：歴史文化学科会議室（板橋校舎2号館4階）

題 目：卒業研究の評価方法について

発 表 者：歴史文化学科 武藤慎一

参加人数：6名

要旨（発表者の内容）：

本学科のカリキュラム上、最重要の科目が「卒業研究」である。必修科目の中でも4年次に配当され、4年間の学修成果の集大成と位置付けられているからである。そのため、学科新設後の早い時期から、その要項を学科で定め、研究計画、研究方法、論文執筆、研究成果の発表などの過程について、それぞれ工夫・改善しながら今年度まで4年間にわたり実施してきた。4年間は一つの節目にあたるので、この機会に特に重要な「卒業研究」の評価方法について、数値化・客観化に努めてきた武藤の今年度の実際の卒業研究評価を例にして、詳細を検討し、他の出席者と討議を行った。

研究会（研修会）で得られた成果：

今回、個別の難しいケースなどの具体例を詳細に検討することで、歴史文化学は幅広い分野を扱い、日本史コース、東西文化コース、観光歴史学コースという3つのコースに分かれているにもかかわらず、学科全体として単なる形式上の一致だけではなく、専門分野の特性による研究内容の違いに基づく研究評価の実情に十分留意しつつも、学科で評価基準の共有をはかることができた。

以上

2024 年度 FD 活動報告書

経済学部

実施日時：2024 年 12 月 6 日

実施場所：2 号館 2-0220 会議室

題 目：新型コロナウイルスの影響が異なる学生の比較

発 表 者：大東文化大学経済学部 高田未里

参加人数：30 名（発表者含む）

要旨（発表者の内容）：

2019 年度～2023 年度の成績データ（氏名・学籍番号は含まない）を用いて、新型コロナウイルスの影響が異なる 4 学年の経済学部生の成績傾向や学籍異動等について発表者が資料をまとめ、参加者と情報共有を行った。

研究会（研修会）で得られた成果

新型コロナウイルスによる影響は、大学での講義実施方法に直接的な影響を受けた時期の学生に見受けられた。さらに、大学生活には直接的な影響はなかったにもかかわらず、大学入学前に新型コロナウイルスの流行を経験して通常通りの通学・学習習慣ができていなかった状態で入学してくる学生の大学生活にも、かなりの影響があった可能性が示された。

以上

2024 年度 FD 活動報告書

外国語学部

実施日時：2024 年 7 月 8 日（月）14:05-14:40

実施場所：板橋校舎 2 号館 2-0221 会議室

題 目：英語学科ゼミナール I における授業活動報告：ジェンダーをテーマにした活動の導入と実践例

発表者：英語学科 野澤督准教授・深澤明利講師

参加人数：42 名

要旨（発表者の内容）：

2024 年度より英語学科では新カリキュラムが始動した。新カリキュラムの試みのひとつとして、一年生必修科目であるゼミナール I にてジェンダーに対する意識を培うことや、自身のジェンダー観への気づきを促すことを目標として、ゼミでジェンダーのテーマを取り扱うこととした。本発表では、ジェンダーの専門家ではない教員が試行錯誤を重ねて行なっている授業活動の事例を 2 件紹介する。

報告者 1（野澤）は、2024 年度前期の授業活動を紹介する。担当しているゼミナールでは、資料収集方法や書誌情報の書き方、レジュメの作成方法、レポートに向けた問題発見のようなアカデミックスキルの獲得・向上を目標としている。そのなかで、学期末に提出するレポート課題のテーマを「身近にあるジェンダー問題」に設定し、学生たちが取り組んでいる活動の概要を報告したい。

報告者 2（深澤）は、ジェンダーの専門家ではないものの、2021 年度から今年度までに担当した 1、2 年次開講科目「ゼミナール I」および「ゼミナール II」において、ジェンダーやセクシュアリティをトピックとして取り上げてきた。一般教養の修得および思考力、判断力、表現力などの向上が主たる目的である。本報告では、ジェンダー/セクシュアリティを題材にしたグループ・ディスカッションやクラス全員での議論に重点を置いた授業の実践の一部を紹介したい。

研究会（研修会）で得られた成果

本発表は、英語学科ディプロマポリシーを体現するために、ゼミ活動の中にジェンダー問題をどう位置付け、実践するかという課題に取り組む、英語学科教員による実践的経過報告である。

ジェンダーというセンシティブな問題を丁寧に扱いながら、価値観を共有できる共生社会をどのように構築すべきか、そのために外国語学部における教育が果たすべき役割を明らかにするとともに、具体的な外国語教育とジェンダー問題をどう結び付けるかについての提案を行った。

限られた時間ではあったが、活発な質疑応答が交わされ、学部教育に存在するジェンダー問題・ジェンダー教育に対する理解が深められた。アンケート調査では、ジェンダー問題をテーマとして取り上げたことに対して肯定的意見が寄せられ、「ジェンダーに対する意識を培うことができた」、「具体的な授業での活動内容については、来年度以降、ぜひ取り入れていきたいと思った」、「身近な素材を使い、段階を踏んでレポート作成にまで導く組み立て方や、学生のコメントを集約し、それに対するコメントを考えさせるなど、活発な議論を引き出す方法が参考になった」などのコメントが見られたことから、大変意義のある研究会となったことが窺える。

以上

2024 年度 FD 活動報告書

法学部 法律学科

実施日時： 2024 年 10 月 23 日 13 時 15 分～

実施場所： 板橋校舎二号館法律学科研究スペース／Zoom 併用

題 目： 高大接続改革と「主体的・対話的で深い学び」

——高等学校における「総合的な探究の時間」の実践例から学ぶ

発 表 者： 河野良継

参加人数： 11 人

要旨（発表者の内容）：

「高大接続改革と「主体的・対話的で深い学び」と題して、学科主任の河野より報告がなされ、報告内容に基づき質疑応答が行われた。

報告においては、まず高大接続の観点から見た平成 29・30・31 年改訂学習指導要領の位置づけについて説明がなされ、その中核に「知識の理解の質を高め資質・能力を育む「主体的・対話的で深い学び」」が置かれていること、そのための授業改善の一環として、高校の教科・科目において、探究科目が重視されている旨の説明がなされた。続いて高等学校における探究科目「総合的な探究の時間」の科目目標、方向性、学習モデルについて説明があり、「自己の在り方生き方に照らし、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら「見方・考え方」を組み合わせて統合させ、働かせながら、自ら問いを見いだし探究することのできる力を育成するようにする」という科目の位置づけゆえに、キャリア教育との親和性の高さについても指摘がなされた。そして、当該科目の実践例として、大東文化大学第一高校（以下「一高」と略）の「総合探究プログラム」の紹介がなされた。一高の先生方へのインタビュー調査に基づいて、当プログラムの経緯・方式・科目担当の先生方の所感について説明が行われた後、一高と大学の高大接続のあり方について、当該科目担当の先生方からの意見の紹介がなされた。（なお、この部分については、一高の教育内容の詳細に関する話題であるため、活動報告書への詳細な記載は避けることにする。）

報告後に質疑応答が行われ、法律学科教員の探究学習への支援・関わりあいの方や、入試方式への探究学習の反映のさせ方等について、具体的な情報提供や意見交換がなされた。

研究会（研修会）で得られた成果

2025 年度より新学習指導要領の下で学んだ学生が入学しはじめることから、個々の教員もその対応が必要であると考えられている。そのため、高校における探究学習の方式や高校教員の指導方法等の詳細について学ぶことができたと同時に、新学習指導要領の下で学んだ学生達への対応についても知ることができたことで、本学科教員の教育力向上に役立った。また、今後の高大接続の方向性についても意見交換がなされたことにより、本学科の教育・学生支援体制の一層の整備・向上につながる議論ができた。

以上

2024年度FD活動報告書

法学部 法律学科

実施日時： 2024年12月18日13時15分～

実施場所： 板橋校舎二号館法律学科研究スペース/Zoom 併用

題 目： 【実践報告】課題探究プログラム・課題探究演習

発表者： 山本紘之

参加人数： 15人

要旨（発表者の内容）：

「【実践報告】課題探究プログラム・課題探究演習」と題して、法律学科教授の山本紘之教授より報告がなされ、報告内容に基づき質疑応答が行われた。

報告は、法律学科が昨年度より実施している「課題探究プログラム」の実施状況と、山本教授が今年度より担当している授業科目「法学特殊講義（課題探究演習）A・B」の内容および実施状況に関するものである。（なお、これらの詳細な中身については、参加・受講している学生の情報をも含むため、活動報告書への詳細な記載は避け、概略的にのみ記載することにする。） まず、昨年度の「課題探究プログラム」の概要について説明がなされた後、課題探究プログラム受講者が履修登録することを前提に立てられた科目である「法学特殊講義（課題探究演習）A・B」のうち、前期開講の「法学特殊講義（課題探究演習）A」の実施状況について説明がなされた。授業では課題探究プログラムで扱ったテーマを素材に丁寧に論点整理を行った後にグループワーキングやポスターセッション等を実施した旨の説明がなされた。次に、今年度の「課題探究プログラム」の実施状況についての説明がなされ後に、プログラム参加者のアンケート結果から今後の実施方法等について検討すべき課題が提示された。そして、後期開講の「法学特殊講義（課題探究演習）B」の実施状況について説明がなされた。後期の授業では、前期とは別テーマを扱い、グループワーキング、班ごとのプレゼンテーション、質疑応答や議論等を実施した旨の説明がなされた。最後に、「課題探究プログラム」と「法学特殊講義（課題探究演習）A・B」について、履修者や、プログラム・科目の担当者の問題を中心に今後の検討点が示されるとともに、今後の学科のカリキュラム等について、中長期的な観点から検討が必要である旨の意見が示された。

報告後に質疑応答が行われ、「課題探究プログラム」のテーマ設定や担当者選抜について、または「法学特殊講義（課題探究演習）A・B」の履修者制限の問題や科目の今後の方向性について、具体的な情報提供や意見交換がなされた。

研究会（研修会）で得られた成果

大学の初年度教育における探究学習について、その具体的な実践例から、探究学習の進め方や指導方法について学ぶことができ、本学科教員の教育力の向上に役立った。また、昨年度より実施している「課題探究プログラム」について、参加者の意見を参考に、今後の進め方について本学科教員間での問題意識の共有ができたのと同時に、課題探究を軸とする授業科目のあり方やカリキュラムの中長期的な方向性について意見交換がなされたことにより、本学科の教育・学生支援体制の一層の整備・向上につながる議論ができたと判断している。

以上

2024年度FD活動報告書

法学部政治学科

実施日時：2024年9月10日（火） 13：30～16：00

実施場所：板橋校舎2号館7階政治学科研究スペース

題 目：「学科における現地研修科目の再編及び高大連携に向けた諸課題の検討」

発 表 者：武田知己教授（下記①）、萩原稔教授（下記②）

参加人数：15名

要旨（発表者の内容）：

① 「政治学インターンシップ」「フレッシュマンセミナー」の再編スケジュールと方針につき、2025年度の開講科目の設定、及び「現地研修実施マニュアル（案）」の提示、及び2年次教育の強化のため、新たな現地視察の科目を設定するという提案がなされた。

② 合格者に対する「入学前課題」、及び入学直後に実施される「政治学プレイスメントテスト」の問題作成・修正等の体制の整備のための、申し合わせの作成に関する原案の提示。

研究会（研修会）で得られた成果

①については、2025年度の開講科目、及び「現地研修実施マニュアル（案）」の内容に関し、議論を経てほぼ提案に即した形で教員間の合意が得られた。後者については、学科協議会の議を経て正式な申し合わせとして定められることとなった。

2年次教育の強化に関する新たな現地視察の科目の設定については、その具体的なプログラム、教育効果がどの程度期待できるのか、また必修科目とすべきか否か、などさまざまな角度から議論がなされ、また学科全体のカリキュラムとの関係性をどのように考えるかという問題提起もなされた。その結果、今回の提案の内容も含め、今後のカリキュラム再編に向けての議論を今年度中から進めていくことへの合意が得られた。

②については、提示された原案に対する一部修正の要望があり、それをふまえて学科協議会の議を経て正式な申し合わせとして定められることとなった。

以上

2024 年度 FD 活動報告書

法学部政治学科

実施日時：2024 年 9 月 11 日（水） 10：55～12：15

実施場所：板橋校舎 2 号館 7 階政治学科研究スペース

題 目：「学科における初年次教育及び出席不良・成績不振学生への対策」

発 表 者：武田知己教授、井上浩子教授、加藤普章教授、坂部真理教授、小林大祐准教授

参加人数：14 名

要旨（発表者の内容）：

政治学科 1 年生向けの必修科目「政治学 A（現代社会と政治 A）」のクラスごとの実施概況について、2024 年度政治学 AB 運営委員長（武田教授）が取りまとめた文書に基づき、担当者 5 名から報告がなされた。あわせて、武田教授から出席不良・成績不振学生への対策に関する申し合わせの原案が提示された。

研究会（研修会）で得られた成果

担任教員の報告に基づき、学生の「読み書き能力」をどのように強化していくか、グループワークなどの効果とその問題点、また入門演習などの科目との連携体制の構築など、さまざまな点に関する議論が展開された。従来の政治学 A B については政治学の基礎知識をしっかりと教授する場として位置づけられてきたが、学生の気質の変化に合わせた工夫も必要だという意見も共有された。

あわせて、欠席が続く学生については、前期・後期の早い時期から積極的に対応すべきであること、また必修科目が少ない 2 年次の学生についての対応などをめぐって活発な意見が出され、申し合わせ（案）の内容に即しつつ、今年度の後期から対応をとっていくことが確認された。

以上

2024 年度 FD 活動報告書

国際関係学部

実施日時：2024 年 7 月 16 日(火)4 限

実施場所：8043 教室

題 目：「学部・院将来構想懇談会」

発 表 者：各委員会からの話題提供と参加者によるフリーディスカッション

参加人数：24 名

要旨（発表者の内容）：

本研修会は、学部・大学院の将来構想について、各委員会が抱える課題を共有し、今後の改善に向けた議論を深めることを目的とした。

英語教育委員会(EEC)からは、英語教育の目標として、全学部生が 4 年間で英語の Major または Minor を選択できるようなカリキュラムへの変更が提案された。

地域言語教育委員会からは、アジア地域言語教育の履修率低下や現地研修の不成立といった課題が報告され、言語の必修化や研修内容の見直しなどが議論された。

国際交流委員会からは、留学制度の奨学金や選考時期に関する問題点、現地研修の参加人数増加や教員の負担軽減といった課題が提起され、改善策が模索された。

教務委員会からは、学位授与方針(DP)の明確化や語学教育の見直し、成績評価や学生支援の改善といった、カリキュラム全体の課題が共有された。

大学院アジア地域研究科からは、定員割れの問題や教員の負担軽減といった課題が報告された。

国際関係学部からは、学位授与方針と教育課程の改善、国際文化学科の志願者数の確保といった喫緊の課題が提示され、2027 年夏までの解決が急務であることが強調された。

活発な議論を通じて、各委員会が抱える課題には共通点が多く、学部・大学院全体の連携強化が不可欠であることが確認された。今後も FD 研修会を継続的に開催し、具体的な改善策を検討していく予定である。

研究会（研修会）で得られた成果

今回の FD 研修会では、学生の学習意欲や異文化理解に関する課題が浮き彫りになった。今後は、これらの課題に対して、どのような人材を育てるかという人材像、そのための効果的なカリキュラムを考え、大学基準協会の改善項目に対応していく。

以上

2024年度FD活動報告書

国際関係学部

実施日時：2024年12月10日(火)4限

実施場所：8043教室

題 目：「第2回学部・院将来構想懇談会」

発 表 者：前回の課題に基づいて、参加者によるフリーディスカッション

参加人数：19名

要旨：

今回のFD研修会では、前回のFD活動で明らかになった学生の課題（アジアへの関心や学修意欲の低下など）を踏まえ、4つの班に分かれて、どのような学生を育成すべきか、具体的な取り組みについて話し合った。

各班とも、アジアに関する深い知識と実践力を持つ、国際社会あるいは日本社会で活躍できる人材育成を目指していることはほぼ共通であった。

このような学生を育てるために、学生の活動を支援する、国内でアジアを体験するプログラム、卒論指導の充実、など、多様な取り組みに関する意見が出された。

今後は、これらの意見を参考に、具体的かつ効果的なカリキュラムを考えていく予定である。

研究会（研修会）で得られた成果

今回のFD研修会で、多くの教員の意識がアジアを理解し主体的に活動する学生の育成にあることがわかった。そのためのカリキュラムでもさまざまな具体的な内容が提出された。今後は、これらのディスカッションを基本に、学部のディプロマ・ポリシー、カリキュラムの改善を検討し、大学基準協会の改善項目に対応していく。

以上

2024 年度 FD 活動報告書

経営学部経営学科

実施日時：2025 年 1 月 14 日（火）

実施場所：板橋校舎 1 号館 1 階 102 教室

題 目：「社会に求められる人材像 ―学生教育の工夫と実践例」

発 表 者：大東文化大学経営学部経営学科

特任教授 中村 隆文 先生

参加人数：26 名

要旨（発表者の内容）：本年度の経営学部主催の FD 研究会では、学生を社会に送り出す我々教員の立場として、「今社会に求められる人材像とはどういったものだろうか?」、「社会に求められる人材を教育するためにどのように工夫し、どのような思いを持って接するべきなのだろうか?」という問題意識のもと、より実践的・具体的な教育上の工夫を模索するための議論の場が重要であると考えた。そこで、教育・実務の両面からのご経験をお持ちの中村隆文先生にご講演をお願いし、研究会参加者同士のフラクナ意見交換を行う機会を設けることとした。

開会挨拶の後、講師より、次の内容に基づいて解説がなされた。

- ① 今社会で求められる人材像
- ② 教育現場での工夫・実践例
- ③ その他、学生に対する思いや実務での経験談など

研究会（研修会）で得られた成果

研究会での検討事項の主眼は、今社会で求められる人材像および教育現場での工夫・実践例に関する教員間の情報共有である。講師である中村隆文先生より、IT の現場での実務的な経験談や大東文化大学への赴任後に感じた学生に対する思いを知ることができた。とくに、今 IT 会社で求められる人材の課題解決に関して有益な知見を共有することができた。

講義後、フロアからの質問として、「新教育課程でのプログラミングの授業が大学教育のなかでどのように影響するか」、「基礎演習での学生にどのように対応すべきか」、「Agile 型のシステム開発が進むなかで IT 人材教育をどのように実践すべきか」などが挙げられ、積極的な意見交換がなされた。

その後、終了予定時刻を過ぎたために、講師への盛大な拍手をもって閉会となった。

時間の制約により質疑応答・意見交換を十分に尽くすまで至らなかったが、本研究会によって、今後の学部教育に対する実践的で示唆に富む知見が得られたと考える。

以上

2024年度FD活動報告書

スポーツ・健康科学部スポーツ学科・健康科学科・看護学科／スポーツ・健康科学研究科

実施日時：2024年6月4日（火）13時15分～14時45分

実施場所：完全オンラインおよびオンデマンドで実施

題 目：熱中症の予防と応急処置（学内発生例を含めて）

発 表 者：福島 齊教授（スポーツ科学科教授・本学学校医責任者）

参加人数：79名（詳細は別紙の通り）

要旨（発表者の内容）

本講演は1. 熱中症の発生機序、2. 重症度分類、3. 疫学（死亡数）、4. 予防と応急処置、5. 水分補給、6. 脱水チェック方法、7. 実技中発生への対応 の7項目にて構成される。1. では暑熱環境中の運動による脱水が生命維持臓器への著名な血流低下をきたす理論を解説した。2. では近年用いられているⅠ度からⅢ度の分類が現場での方針に即したものであるで紹介した。3. では熱中症死者は8割以上が高齢者であることと同時に学校体育での死者もゼロにはなっていない、肥満傾向がある男子が危険因子であると述べた。4. および5. では運動前後の水分補給について述べたが水分のみならず塩分の重要性も解説した。応急処置では新しい情報として氷のような冷たすぎるもので大血管（頸部、腋下、鼠径部）の近くを冷却すると逆効果になるので、水を噴霧して扇ぐないしは直接ホースで水をかける方法について紹介した。また熱中症の一般論だけではなく、7. において本学内（特にグラウンドや体育館）で発生した場合の緊急連絡網や症状別のフローチャート、救急車誘導法について紹介し作成した資料は体育実技の現場に常備する予定としており、授業中の不測の事態に備えることを目的とした。

研究会（研修会）で得られた成果

ここ数年の猛暑の影響で授業中に熱中症で倒れる学生たちが急増していることから、今回の研修はすぐに何らかの形で生かされるであろうことが期待される。特に如何なる体質の者がなりやすいのか、もし熱中症になった者がいた場合にどのような処置が適切であるか等、具体的な事例を知ることができたため、今後は多くの教員が不測の事態が起きたとしてもうろたえることなく対応できるのではないかと考えられる。また救急車の移動ルートを皆で確認する等、熱中症と限らず授業中における学生の安全を強化する意味でも今回の研修会は非常に得るところが大きかったと考えている。

以上

2024 年度 FD 活動報告書

スポーツ・健康科学部 健康科学科

実施日時： 2025年2月25日（火）16:00～17:30

実施場所： zoom によるオンライン開催

題目： 日本人が世界に挑戦する意義と男女混走のバイク競技から学んだ多様性への理解

発表者： 株式会社チームマリ代表 井形とも 様

参加人数： 19名

要旨（発表者の内容）：

株式会社チームマリ代表である井形とも氏（一般社団法人日本モーターサイクルスポーツ協会によるMFJ 女性スポーツ部会員、大阪モータースポーツ推進協議会委員、等）は、WGP（World Grand Prix の略称、オートバイの最高峰レースの一つでロードレース世界選手権とも呼ばれる）の元選手であり、現在日本で特に女性ライダーの二輪車安全運転指導活動やレーサー育成等の事業を手がけられている。実姉である井形マリ氏は日本人女性として二人目となる国際A級ライセンスの所有者で、その影響を受けて井形とも氏も日本国内のレース参戦を開始し、その後1994年から2年間日本のチームと共に世界選手権に参戦した。この間の最高位は1995年チェコGPの7位で、残念ながら表彰台には届かなかった（しかしながら、その後2016年に当時のご活躍を表してWGPなどを統括する国際モーターサイクルリズム連盟からFIM WOMEN LEGENDを受賞されている）。WGPというのはオートバイというエンジン付きの道具を使うため現在も男女混走の競技であるが（ただし、モトクロスなど男女で参戦クラスが分けられている競技もある）、女性としてWGPにフル参戦を果たしたのは、日本ではこれまで井形とも氏のみであり、世界でも数名しかいない。このように、女性のWGPへの参戦は日本だけの問題ではなく、世界的な傾向といえる。なぜこれほどまでに女性の選手が少ないのか、井形とも氏は「男女間の（あくまで平均的であるが）身体的・精神的な違い」が一因としてであると分析している。日本に帰国してからその後男女の性の違いに思い悩み、ホルモン療法などを受けられたご経験から、その男女間の特に身体的な違い（筋力トレーニングの効果など）を実感されたそうである。精神的な違いについても、男性の闘争心など女性とは異なる部分があると思うという。また、日本と世界との両方のロードレースを経験されて感じられた大きな違いは、世界選手権は人種や生活習慣などの異なる多様な人たちの集まりであるということである。その中では、お互いの多様性を認めてチーム内で協力しながら、レースでは自己主張をして競うことが必要になってくる。ただ、井形とも氏自身はそのような貴重なご経験を通して、男女を含む多様性についてそれはそれであってよいものだと考えるようになった。オートバイの世界選手権でも、市販車を使用した選手権で2024年からFIM女子世界選手権（World WCR）が設立され、時代の流れがようやく追いついてきた感がある。現在は、日本の国内選手権からアジア選手権さらにはWorld WCRへの参戦を視野に入れた後進の育成に力を注いでいる。大事なものは、男女も含めそのような多様性について知ることであり、今後ますます重要になってくると考えている。

講演後の質疑応答内容（一部抜粋）：

Q： 元男性のトランスジェンダーが女性の競技に参加することについてはどうか？

A： 井形とも氏自身のご経験から、男女間の肉体的・精神的な差はあるというのを実感として感じた、したがって、元男性のトランスジェンダーによる女性の競技への参加はあってはならないと（現在

は) 考えているが、これも参戦クラスについては乗り越えなければならない難しい問題があると思う。

研究会（研修会）で得られた成果

海外に出て競うということは、WGP 等スポーツ分野だけの話ではなく、インターネットや企業活動、専門的な学術活動などを通じて今後ますますグローバル化が進む私たちの生活や職場環境においても遠い別世界の話ではなくなってきており、本学科の学生や若手教員も世界を舞台に活躍する可能性を探る上で大いに参考となることが期待される。世界を舞台にするには、やはりその世界で戦いたいとか世界へ行って勉強したいという意欲がまず必要で、そしてできればなるべく若い時に行った方が柔軟に対応できるだろうと思うとのご意見も伺った。またグランプリレーサーを引退後、井形とも氏ご自身における多様性と向き合われたご経験を通じ、当時（現在においても、ロードレース世界選手権には男女の参戦区分がない）男女の区別のない競技の世界で、特に女性選手が男性選手とイコールコンディションで競技をすることの体力的・精神的な難しさに対するお考えなどについては、現在はそのような多様性の存在はそれはそれで受け止めながら、その中でできるだけの対処をしていくことの重要性を感じた。本学にもさまざまな学生や教職員がいる中で、人間社会における多様性のあり方について改めて考えるきっかけとなった。

以上

2024年度FD活動報告書

スポーツ・健康科学部 看護学科

実施日時：2024年8月1日（木）～10月31日（木）

実施方法：オンライン(120分)

題目：新人・後輩のアセスメント力を育む指導

講師：阿部幸恵教授(東京医科大学シミュレーションセンター長)

参加人数：30名

テキスト：阿部幸恵、新人・後輩のアセスメント力を育む指導、日本看護協会出版社、2023

要旨：

看護基礎教育において、「アセスメント力」を育むことは重要である。アセスメントは、情報を収集し、状態を分析して患者の個別性を踏まえ、顕在的・潜在的な課題やニーズを理解するプロセスであり、知識と思考力が必要である。しかし、アセスメントを苦手とする学生が多く、学生一人一人に合わせた指導を行うことに困難を感じている。今回は、テキストと動画にて「情報収集とアセスメント」「指導の心得7か条」「アセスメント力を育む指導」について受講し、アセスメントの指導のあり方について改めて考える機会となった。

研修会で得られた成果：

本研修では、学生のアセスメント力を育むための指導方法について理解し、特に臨地実習でのアセスメントの指導に役立てることを目的としたが、「学生の思考過程のどの部分にアプローチをすればよいかを考えるうえで参考になった」「自分が見えているものと、学生が見えてるものの違いを改めて感じ、今後の学生指導に生かしていきたい」、等のアンケート結果から今後のアセスメント指導に非常に有意義な研修内容であった。

※アンケート結果

<https://drive.google.com/file/d/12VVIBXbQvOX5dLf0CGACKMkcpQSWr3Z3/view?usp=sharing>

以上

2024年度FD活動報告書

社会学部社会学科

実施日時：2024年7月18日（木）13:30－15:00

実施場所：2-0220 教室（板橋校舎2号館2階）

題 目：合理的配慮への対応について

発 表 者：山田さま・三瓶さま（学生支援課）、猪俣さま（学生相談室）

参加人数：15名

要旨（発表者の内容）：

学生支援課と学生相談室の方に「合理的配慮への対応について」のテーマで以下の3つの内容をお話いただいた。

- ① 障がい学生支援に関する基本的な考え方－「合理的配慮」と「社会的障壁」について考える－（山田さま）

2024年施行の「改正障害者差別解消法」の内容と大学教員が配慮すべき事項についてご説明をいただいた。合理的配慮と社会的障壁について、実例をあげながらお話しいただいた。また、ガイドラインの説明や合理的配慮対応の窓口やスキームについてもご説明いただいた。

- ②本学での障がい学生支援について（三瓶さま）

本学での障がい学生への支援体制についてご紹介いただいた。また本学の障がい学生数と配慮すべき内容の内訳をもとに、本学が行っている障がい学生支援の取り組みについてお話しいただいた。

- ③学生相談室カウンセラーからみた合理的配慮について（猪俣さま）

個人情報をお隠しの上で、本学と本学以外での具体的な対応事例をあげて対応の際の注意点等をお話しいただいた。

研究会（研修会）で得られた成果

「改正障害者差別解消法」についての知識を得ることと大学教員として配慮すべき内容についての理解につながった。

ガイドラインの説明や合理的配慮対応の窓口やスキームについてもご説明いただいたことで担当授業・演習で該当する学生がいた場合、相談を受けた場合の基準や段取りについて理解することができた。

本学および本学科のこれまでの配慮事例を用いて配慮すべき内容を説明していただいたことで実際に対応する場合でのイメージをつかむことができた。

欠席者には、配付資料をメールで配布し確認してもらうようにした。本学科でも配慮対応の学生が増えてきていることもあり、本学の状況、合理的配慮のガイドラインとスキームを全教員で確認できたことには意義があったと考えている。

以上

2024 年度 FD 活動報告書

社会学部社会学科

実施日時：2025 年 3 月 13 日（木）12:00－1300

実施場所：2-0220 会議室（板橋校舎 2 号館 2 階）

題 目：視覚障がいの学生への対応について

発 表 者：鶴田（社会学科主任）

参加人数：18 名

要旨（発表者の内容）：

2025 年 4 月から社会学科に入学する視覚障がい学生への対応について教員間での情報共有を主な目的として FD 研修会を実施した。

まず「1. 合理的配慮について」にて合理的配慮と社会的障壁について改正障害者差別解消法、文部科学省の指針、本学のガイドラインをもちいて説明した。次に、「2. 視覚障がい学生について」として、視覚障がい学生の情報、これまでの経緯と対応の情報を共有した。そして、「3. 支援体制と支援内容について」として、支援体制、現時点での支援内容、時間割案について説明した。

研究会（研修会）で得られた成果

第 1 回 FD 研修会（7 月 18 日実施）で合理的配慮と社会障壁について学んだが、その復習を兼ねて合理的配慮と社会障壁排除への教員の意識を高めることができたと考えている。また、実際に視覚障がい学生入学後の対応について具体的な支援内容と支援体制について情報共有ができた。視覚障がい学生との事前面談を終えた教員からの情報提供もあり、さらに具体的な対応イメージを共有することができた。

4 月からの学生の入学を前にして全教員で、合理的配慮の必要性と具体的な対応について情報共有できたことには意義があった。

以上

2024 年度 FD 活動報告書

文 学 研 究 科

実施日時：2024 年 11 月 25 日(月) 14 時 55 分～16 時 30 分

実施場所：板橋校舎 2 号館 2 階 2-0221 会議室

題 目：『大学院授業の現状と展開について』

発 表 者：田村 正彦 准教授 (日本文学専攻)

小塚 由博 教授 (中国学専攻)

藤村 希 准教授 (英文学専攻)

植松 浩祥 教授 (書道学専攻)

飯牟礼 悦子 講師 (教育学専攻)

参加人数：33 人

要旨 (発表者の内容)：

まず、各専攻の発表者より 10～15 分程度の時間配分で報告を行った。各発表者の報告内容は以下の通り。

- ・資料読みを進める様子、修士論文の指導について、学生とのやりとりを具体的に挙げ、今後に向けた問題提起、理解を深めるための方法などが示された。(日本文学専攻より)
- ・学生の研究意欲をいかに削がないようにするための具体的な方法が示された。可能な限り学生の自主性が引き出されるような授業を組むことが重要であるとの見解が示された。(中国学専攻より)
- ・学部卒業以上の専門的な英文読解力を身につけること、また、修士論文に必要となるリサーチ及び代表的な研究方法、論文を書く方法を実践的に学ぶことを目標とした。さらに、学科の他の教員方から聞き取りまとめられた具体的な体験談が紹介された。(英文学専攻より)
- ・学生個々の研究テーマに沿って進め、各自が書いた作品を持ち寄り、お互いに批評し合うようにしている。実践を伴わせながら、批評理論も総合的に伸ばしていく。最終的には修了制作展を意識した作品制作へ向かうように指導するとの見解が示された。(書道学専攻より)
- ・2024 年度新設科目「教育総合研究」について報告があった。当該科目は、複数の教員によるオムニバス形式授業で、それぞれの専門分野に導いていくような多視点の特徴を持つ授業であり、また、年 3 回の研究発表会では、修士論文執筆に向けて、テーマ決めから研究方法、研究の報告性など、多岐にわたって授業内で議論を行っている旨の報告があった。(教育学専攻より)

研究会 (研修会) で得られた成果

以上より、それぞれの専攻からの報告の通り、大学院授業の実践及び内容、方法、現状などが、各専攻より提示された。終了後実施された、事後アンケートにおいては、「専攻を跨いでの授業内容・方法の情報交換を行う機会は多くはないため、貴重な機会となった。」「各専攻が試行錯誤しながらも特色ある大学院教育を施していることがわかり、自専攻で実践できそうな取組み (特に留学生の増加に伴う丁寧なコミュニケーションの取り方や指導方法について) は積極的に取り入れていきたい」との意向が確認できた。

また、次回 FD 研究会のテーマ検討についても様々な案が提示され、生成系 AI の有用な使用事例や、より横断的な研究会となるよう「文学領域」・「言語領域」・「技能習得領域」の共通ジャンルに分けての発表や、文学研究科のこれまでの歴史を紐解き、そこから新たな取り組みを模索してはどうかといった活発な意見が寄せられた。

以 上

2024 年度 FD 活動報告書

経済学研究科 経済学専攻

実施日時：2024 年 12 月 6 日(金)16 時 58 分～17 時 31 分

実施場所：2 号館 2-0220 会議室

題 目：「研究指導の現状と課題」

発 表 者：郡司大志 教授、角田保 准教授、岡村與子 教授、菅野早紀 准教授〔発表順〕

参加人数：12 人（発表者含む）

要旨（発表者の内容）：

本年度の経済学研究科 FD 研究会は、「研究指導の現状と課題」というテーマで、前期課程 1 年生と 2 年生（全員留学生）の研究指導を担当している教員に、担当学生にどのように研究指導しているかを自由に語っていただいた。

学生の研究進捗状況や学生とのやりとりなども交えながら、たとえば、

- ・ 先行研究を読む際の方針を決め、学生自身の研究との関連をどのように意識させるか
- ・ アカデミックな研究に仕立てるにあたってこれまでどのように工夫してきたか
- ・ 研究指導をする際に何を大切にしているか

などについて具体的に紹介がなされ、経済学研究科全体で研究指導の現状を共有できた。

併せて、研究指導等で苦慮している点などについてもお話いただいたところ、日本語能力に関するものが多く、日本語による文書添削が大変である、発表資料の修正が予想以上に難航している、日本語で表現できないのか研究内容を理解していないのか見誤ることがないようにしている、などが挙げられた。

今回の FD 研究会は、研究指導の現状を共有・情報交換することで参加者全員の教育力向上につながるよい機会となった。また、意見交換の中で、大学院担当コマ数増加による負担過重の問題、経済学研究科で導入的・基礎的科目と位置付けている 1 つの講義科目の担当教員不足で専門外の教員が担当している問題、上級コース履修の検討など、経済学研究科全体の今後のあり方を考える材料も得られ、意義ある研究会となった。

以上

2024 年度 FD 活動報告書

法学研究科

実施日時： 2025 年 1 月 22 日(水) 14:20～15:00

実施場所： 板橋キャンパス 1 号館 1 階 1-0420 教室およびオンライン (Zoom)

題 目： 本研究科の大学院の実情にあった学修成果の評価指標の検討

発 表 者： 藤井 康博

参加人数： 20 名

要旨（発表者の内容）：

2024 年度大学院法学研究科 FD 研究科において、学修成果の可視化について、第 1 に、本研究科の事業計画「学修成果を測定する指標の選択と開発」を確認した。第 2 に、用語確認として「学修成果」「学習成果」と「学修ポートフォリオ」「学習ポートフォリオ」の意義を確認した。第 3 に、ポートフォリオの一選択手段としてのクラウド型教育支援システム manaba を活用する流れと効用について、ひいては学修成果の評価指標について検討した。その後、質疑応答において、例えば、チェックシートの活用、カリキュラムマップとの関連、実質的な指導経験について、意見や課題が提示され、活発な議論がなされた。

研究会（研修会）で得られた成果

教員の間で、計画の再確認、用語の確認、manaba の活用可能性について共通認識が得られた。ひいては学生自身が自己省察した研究・論文執筆、その過程と成果の測定・評価に資することにつながりうる。総じて、実質的な教育力の向上を目指し、大学院授業の方法の改善を図るべく、教育支援の他の選択肢の可能性も含め、次年度以降の共通課題を相互に確認することができた。

以上

2024 年度 FD 活動報告書

外国語学研究科

実施日時：2025 年 1 月 20 日（月）10:30～11:00

実施場所：Zoom リモート開催

題 目：デジタル・ヒューマニティーズとその活用方法

発 表 者：モリス・ジョン

参加人数：12 名（アンケート回答者数）

要旨（発表者の内容）：

今回の FD 発表では、大学院においてデジタル人文学（DH）が果たす重要な役割を強調する。デジタルツールと学際的アプローチを統合することで、従来の研究および教育方法論をどのように革新できるかを示す。まず、デジタル人文学を定義し、その範囲を明確にする。この学際的分野は、人文学と先端技術を融合させるものであり、テキスト分析、デジタルアーカイブ、データ可視化などの具体例を通じてその広がりを示したい。

次に、既存のカリキュラムにデジタル人文学を統合するための戦略を探る。DH イニシアチブを成功裏に導入した大学のケーススタディを参照し、カリキュラムの再設計および DH 方法論の導入に関する実践的な洞察を提供する。プロジェクトベースの学習を重視することで、学生のエンゲージメントを向上させ、学際的な協力を促進する。

さらに、DH に関連する教育方法とデジタルツールを紹介する。Omeka、Voyant Tools、ArcGIS などの具体的なツールに言及しつつ、これらがどのように従来の教育方法を強化し、学生に実用的なデジタルスキルを提供するかに焦点を当てる。DH を取り入れることの利点を強調し、研究能力の向上、批判的思考の促進、デジタルリテラシーの育成について論じるものである。

研究会（研修会）で得られた成果

「これまで「デジタル・ヒューマニティーズ」について知識がなかったが、今回の発表でその活用法を学ぶことができ、今後の可能性についても考えることができた。」「デジタルツールを取り入れたいとは思っていても、どのようなツールがどのような効果をもたらすのかが分からなかったが、今回の発表を伺って、そのきっかけを掴むことができた。」「自分の興味のある分野でどのような研究や知見の蓄積があるのか、ぜひ調べてみて、また授業や研究に活用できるか検討してみたい。」など、積極的に研究・教育への活用を考えたいという意見が多く見られた。一方、「デジタル・ヒューマニティーズ」によって研究資源のデジタル化、情報化がもたらすリスクをどう予見し、影響を最小限に食い止めるべきかという問題に対する技術的側面にも今後注目する必要があるのではないか、との意見も見られた。

以上

2024 年度 F D 活動報告書

アジア地域研究科

実施日時：2024 年 7 月 16 日（火曜日）15 時～16 時 40 分

実施場所：東松山校舎 8 号館 8043 教室

題目：学部・院将来構想懇談会

発表者：岡本学部長、須田研究科委員長、遠藤教務委員長、井上国際交流委員長

ムロイ英語教育委員会委員長、田崎地域言語教育委員会委員長

参加人数：19 名

○要旨

今回の研修会は、授業改善をテーマとしてきた従来の研修会とは異なり、近年の入試状況や 2023 年度の認証評価で指摘された問題点に着眼し、学位授与方針（DP）、教育課程（カリキュラム、語学教育、現地研修、演習、キャリア教育など）、入試（及び大学院の定員確保）など国際関係学部・アジア地域研究科が取り組むべき課題を整理することを主たる目的として実施された。とくにアジア地域研究科からは、積年の課題である定員充足と、学生指導体制における教員負担の軽減に関する問題提起がなされた。

研修会は二部構成で行われた。一部では、英語教育委員会、地域言語教育委員会、教務委員課会、国際交流委員会、及び大学院アジア地域研究科から、それぞれが直面する懸案や課題が報告され、学部長からは大学基準協会による改善課題が説明された。

第二部では、第一部の報告をふまえ、参加者が 4 グループに分かれ「学部及び研究科の課題発見」をテーマにフリーディスカッションを行った。

○研修会で得られた成果

グループディスカッションの後、それぞれのグループがまとめた課題を全体で共有した。課題は多岐にわたった。学生の対面コミュニケーション能力や学びのモチベーションの低下など学生指導の現場で直面する課題、「国際文化」に対する高校教員や保護者の印象など志願者減にかかる課題、アジア地域研究への関心を喚起する現地研修の参加率の低減などカリキュラム全般に関する課題などである。

今後は、研修会で共有された課題を執行部で集約し、主要な課題の解決に向けた議論を進めることも確認された。

なお、研究科の課題の一つとして提起された学生指導体制における教員負担の軽減策に関しては、研究科からの提案をうけ学部の教務委員会での検討をへて教授会で審議されることになっている。

以上

2024 年度 FD 活動報告書

経営学研究科 経営学専攻

実施日時：2024 年 10 月 15 日（水）13:30~14:30

実施場所：板橋校舎 3 号館ビジネスゲームルームおよびオンライン（Zoom）

題 目：生成 AI の現状と学生の利用を前提とした講義の工夫

発 表 者：白井 康之 経営学部教授

参加人数：17 人

要旨（発表者の内容）：

ChatGPT をはじめとした生成 AI は日々凄まじい進化を遂げている。生成 AI の特徴としては、情報を的確にサマライズでき、言語生成能力が優れている一方で、知的創造能力は優れているとは言い難いことがあげられる。学生が生成 AI を使うのを止めることはもはやできないし、生成 AI を使ったかどうかを教員は知ることができない。そこで、課題の出し方を工夫することで、生成 AI 丸パクリ的回答をしてくるレポートを（使用の有無によらず）単純に評価を低くすることができる。講義の内容によるが、生成 AI をアシスタントとしてうまく使えるように指導することが教育上の効果も高いように感じる。

研究会（研修会）で得られた成果

現在、生成 AI は、インターネットを通じて手軽に利用でき、レポート等の講義課題に使用されているケースが見受けられる。そこで、今回の FD 研究会では、白井 康之 経営学部教授に「生成 AI の現状と学生の利用を前提とした講義の工夫について」という題目でご講演いただいた。

講演の前半部分では、生成 AI の仕組みや ChatGPT とその他の生成系 AI の比較、生成 AI にできることとできないことについてご教授いただき、生成 AI は言語生成能力が優れている一方で、知的創造能力は優れているとは言い難いという特徴を理解することができた。

講演の後半部分では、学生の視点での生成 AI の利用や学生の利用を踏まえてのレポート課題の出し方を説明していただいた。生成 AI を利用すれば、一般論・一般知識を問うレポートでは、良いレポートとほぼパクリレポートは、ほぼ見分けがつかなくなってしまう。そこで、レポート課題を出すとき講義内容や現在の学生の状況に強く依存する具体的なテーマに対するレポートを課し、独自の視点を重視することを伝え、深掘りさせるのがよいのとご指摘があった。

最後に、①生成 AI の回答が信頼できるどうかを常に批判的に考え、他の一次リソースで情報を確認する。②自分に知見、知識がない限りは使っても意味がない。③知識のヒントを得たり、アイデアをブラッシュアップしたりするには有用である。④生成 AI は Generative だが Creative ではないので、独自の批判的思考、問題解決能力、創造性スキルを伸ばすことが重要である、といったことを教員から学生へ伝えることが大事なのではないかとの提言がなされた。

以上

2024 年度 FD 活動報告書

スポーツ・健康科学研究科・スポーツ・健康科学専攻

1. 実施日時： 2024 年 10 月 22 日（火）午後 13 時 15 分～14 時 00 分
2. 実施場所： 東松山校舎管理棟 大会議室
3. 講師： 正宗 鈴香 教授（本学国際交流センター）
4. タイトル： 「留学生の現状と支援について」
5. 参加人数： 27 名（詳細は別紙の通り）
6. 要旨（研修会の内容）

国際交流センター教授として、本学留学生の日本語教育を担当され、アスリート留学生サポート、在学生との国際交流にもご尽力いただいている正宗鈴香先生を講師にお迎えし、1. 留学生の動向（本学と日本全体）、2. 日本語の試験：JLPT と EJU、3. 留学生の課題と対応方法、4. 支援について：ライティング支援とアカデミック・チューター制度について取り上げ、お話を頂いた。各項目について概要を以下にまとめる。

1. 留学生の動向（本学と日本全体）

全国的に留学生は増加傾向で、2023 年度は前年度比 20.8%増である。出身国は中国（42%）に次ぎ、ネパール（13%、前年度比 56.2%増）が増加傾向である。本学では、2025 年度より学部留学生の割合目標値を 5%としているが、現在は 3.4%であり、全国平均 4%以上に対し低い。関東私大では、早稲田大学が学部生 5,176 人（13.6%）と最も多くなっている。本学の留学生の中国（80%）、韓国（10%）であり、日本語力は中級レベルがボリュームゾーンであるが、ここ数年、入学者の日本語力はややレベルダウンしている。

2. 日本語の試験：JLPT と EJU

大学入試で使用される外部検定試験は、主に日本語能力試験（JLPT）と日本留学試験（EJU）である。各私大の EUJ 合格目安の日本語試験では、GMRCH で 360 点（90%）、日東駒専で（300 点）75%、城西国際、桜美林、創価で 200 点（50%）。本学は、入試に EJU 結果提出は必須であるが、点数基準は設けていない。しかし、学部授業についていくには 270 点以上は欲しい。大学院生には、EJU などの日本語定量試験提出は要求されないため、研究に要する日本語力が無い場合がある。その場合、論理展開や複雑な文章に理解が出来ないこともあるため、研究生として 1 年様子を見ることも多い。

3. 留学生の課題と対応方法

留学生は「言語・文化的背景が異なる」ため、理解、認識に時間がかかる。暗黙知の側面を言語化するのに日本人の 5~10 倍以上の時間がかかると考えるべき。JLPT で N2 以上の日本語力があれば、言い方を工夫すれば伝達は可能である。大学院生特有の課題としては、研究室での人間関係の構築や、暗黙知での研究の進め方、指導の受け方がわからない、複雑なコミュニケーション議論が難しい、日本語での文章力、プレゼン力が伴わないなどがあり、個別適正化をはかる必要がある。

4. 支援について：ライティング支援とアカデミック・チューター制度

ライティング支援は添削が目的ではなく、考える過程に支援者が参加することを主眼に置く。本学の図書館内では、留学生に限らない支援として「猫の手」というサポートがある。院の科目として設置する方法もある。アカデミック・チューター制度は、M1 に対して、専門性上級生の院生が、日本の文化

的な背景も教えながら一緒に作業をする支援である。定期的な時間確保による支援の実施が求められる。

以上、まとめとして、留学生がいる研究室では、認識、理解を深めるために努力を要する。よって、研究室の学生にも多様性のある状況を理解してもらい、支援体制を充実していくことが望ましい。

【研究会（研修会）で得られた成果】

スポーツ・健康科学研究科では、ここ数年、中国出身の留学生を一定数受け入れている中で、留学生への指導方法や支援方法において、今回の研修会を通して今後すぐにでも生かすことが出来る学びが多く、教育環境の充実、学生の満足感向上に向けた内容であったと感じている。研修会後のアンケートにおいては、本学に限らず他大学の留学生の学力レベル、サポート状況などが知れたことが良かったとの意見が得られた。

以上